日夏耿之介全集

監修＝
矢野峰人
山内義雄
吉田健一

第一卷＝詩集

河出書房新社

日夏耿之介全集　第一卷　©1973

一九七三年六月二〇日印刷　一九七三年六月三〇日發行

定價……五八〇〇圓

著者……日夏耿之介

裝畫……長谷川潔

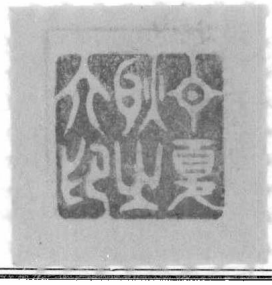
裝本……杉浦康平・辻修平

發行者……中島隆之

發行所……河出書房新社

東京都千代田區神田小川町三―六　電話〇三―二九二―三七一一　振替東京一〇八〇二

3392―437001―0961



第一卷＝詩集

目次

轉身の頌……3
黑衣聖母……129
黃眠帖……297
咒文……375
拾遺篇……397
初出及び校異……425
詩作品一覽……587
解題……597
詳細目次……601

第一卷

詩集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

轉身の頌

孩幼は無辜也、忘却也、新起程也、遊戯也、身自らにしてめぐる車輪也、原動力也、聖確言也。はらからよ、然也、聖確言は欣求せらる。今、精神が意欲するはそれ自らの意欲也。
遁世者が自らのためにかち獲たるは自らの世界也。

——「三つの轉身」『ツァラツストラ如是説』

詩は分離の態の道也

——ステファンヌ・マラルメ

詩集

轉身の頌序

信仰は、己れが心にまことに肯定しうるものを享け入れ、不信仰は、肯定しうるものさへも斥けてしまふことである。

——ラルフ・ウオルト・エマスン

一

凡そ、詩篇は、所縁の人に對して、實在が、そのまことの呼吸の一くさりを吹き込めたものの、或る機會の完き表現でなければならぬ。それは、選ばれたものにも儘ならぬ、選ばれぬものへの宿命的示唆である。媒靈者のない自動記書（オートライティング）である。また言へば、天來の『智慧』である。詩家は靈感の浮橋に依つてのみ、しばしば、神の御國に歡遊する。蟲類の細微體から宇宙諸相の大いに臻る悉皆觸目の存在當體は固より、かりそめにも人間の心緒に渦卷くあらゆる情感の搖曳は、詩人の對境として、遙かの國の內陣祕龕から賦與せられた『窄き門』である。この不可思議の扉口を過ぎて、汪々と絕對の神の伊吹きが貫き流れる。現象界と、現象界から放散する薰香との二個から切り放たれたまことの神慮かはつきりとのぞみ觀られる。されば、靈感の受難週は、小やかな詩人の個體をも、易く神人融會の『賢人石』のなか深くに押し匿す。かかる聖なる異香の流動は選ばれたものの全てを捉へて、入神（トランス）の中有境に投げ込む偉いなる

虛空の手てある。

二

貧しきわれにも、夜更けてしばしば病苦に眼覺め、一二時間の枯坐觀想を強ひられるとき特に、あるひは白日の閑寂な密林、光り眩ゆい海邊の散策の折りなどにも、また偉人の殘し與へた古名品に臨む時などにも、言ひ表はし得ない快活なたましひが、渾身の血潮を悅ばしい力に充ち滿ちた、しかし淑やかな奔躍に驅り、肉身はかすかに顫へて、ものとしもないときめきに胸わななく一瞬時がある。この時夜ならば枕頭にいつも置いてある白紙に焦慮することなく、この自らをとどめんと努める。

この大喜悅は、宗門の徒によつて法悅と稱ばれ、藝術の表現人によつて靈感と假りに名つけられてゐる。表現者の稟性の種別に應じて、靈感はさまざまの時と處とに鬼人のごとく出沒する。あるものは酒精又は印度大麻の蠱惑の媒力を要し、あるものは腐れかかつた林檎の香をかぎ、またあるものは聖經を誦して、眼前に形態を備へて出現する幻覺を夢心地に禦ぎながら、夢幻の間に表現の努力を了へる。

靈感は、又、表現人によつて著しく虐遇され、殆ど其の可能性を認められない事すらもあるけれど、多く之れは、彼れの心向の特殊性に基くのてあつて、かかる人の場合ても、靈感は自由に遠慮なく僭行して謙虛な行ひを果してゐる。單に一庶物の並列があらうと、積極の緊張した心の一聯鎖があらうと、外貌に現れたものには、固より何のかかはりもない。所詮、偉いなる力は、時を竊んて人間の胸深く忍ひ入り、腕を

つたはつて指頭のペンに顯れ出て、聽て文字となり言葉をなして分娩が完了する。優れた詩人は、ひたすらに謙抑篤實な實在本體への媒靈者(メディアム)である故に跪拜せられる。

詩人の精進は、いつもその心の大洋に浪打つ生の律動の生命を直視する各努力であり、又、唯一大靈への默禱、本體への思念である。その純眞にして敢爲なるべき『我』の生活が、たまたま狐疑の索迷に陷沒してゐるとき、時あつて多くの擬靈に欺かれ、また、自己自らのために誑かされる。

詩人のたましひは玻璃の傀儡である。黄蠟の人形である。かれらは、地熱や日輪の光のために溶ける。自らの火のためにも身を亡ぼす。最も纖美に神經的に反響を持續する機具は、常に最も高貴に造られねばならぬ。

宇宙に遍滿した光あるたましひは、表現人の心緒に錯交し、心の硝子管をつたはつて、あらゆる人の感覺を通じ其の心靈らの面前にまで展開される。藝術史上多くの、Beatific Vision は、この奇蹟の春の朝の鳥聲である。

三

美の狂歡に倚るジョン・キイツの離脱は、純主觀の古希臘主義を壓縮して

『美は眞なれ　眞こそ美なれ』

の高き道を踏んだとき、オリュムポスの山上に幻感した異教諸神の巨手によつて綠明の中空に描き出された物心一如の Cockaigne である。ロセノティが詩集『性命の家』に於ける麗人の美貌に力服されるのは、かの覺認せられた肉塊の祕奥に安坐する神意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の不可思議性を纖巧に感悟し得たからである。これら陶醉者の三昧境は、リュカティヤ巖頭の古代女詩人が、『うるはしきヘラスの全圖よりも、少人よ、おん身を』と叫んだ至情、ウーマル・カイヨムの悲願、サーティの想念とともに悉くわれらの心淨く磨き出され欣求の力強い修道の果として高きより惠まれたる地上樂園だからである。

纖く靑白い病詩人の生命の小函にも、信と愛と望とにかがやいた天人の黑瞳は宿る。かかるとき、身肉は征服せられ、裸身にして淸き心意は靈肉融會の一視點に凝縮せられる。

又、かかる場合と反して、エミリ・ブロンテが女性らしき、靑く澄み切つた晩禱に倚る忘我や、ジェフリーズ、ウォズウォース達が、自然界の核心深く食ひ込む凝視の黑く冴えわたつた心眼にも、同じく、物の象を掴むで、象の奧に眼をひたと瞑ぢて橫臥する心の完き生命を掘り出す性命力が確存し、美に倚る解脫者が美を愕くべき透視力で眺めて美の奧の力に想到する樣に、彼等は物象を祈念の涙で力服して、霧霽れて綠の山々が姿を現ずるやうに、物の象は淡雪のごとくに溶けさり、すべて萬有の精神は悠久の力を帶び神靈となつて顯現する。

かくどのやうに違つた樣式による藝術も、變つた流派も、表現人の性命自らが偉大なれば偉大てあるだけ深刻に精緻に瞭確に宇宙實在の基本精神を發見し、新しき創造の歡喜を一身に浴びて神人合致の福祉に參しうる。

特に、科學の破産を經驗し既成宗教の更改と其の新しき見方說き方に腐心する現代にあつて一部の注心を牽いてゐる媒靈者らの提示した心象の諸問題は、上代煉金道人らの殘して去つた不思議な心緒の自由な飛躍とともに、ブレイクの幻覺した小動物の精靈に關する描寫や、イエイツがたまたまなる生靈徜徉の記錄などに完き藝術上表現を得てゐるが、すべて表現に依る離脫、藝術に依る靈覺を經驗した選ばれし人々のフレクシブルな心靈は、かうして、詩家稟賦の詩技の黃金の鍵により、久遠の國の關の扉をただ貧しい心持て一杯に押し開く。

五

詩技の事は稟性神賜てあつて、後天の精進は、末梢を矯め直し、詩家純眞の氣稟をば、邪路に迷はぬやう、延々と快活に育むのみに過ぎぬ。專念の努力が遂に熟達の境に臻つた例は、畫事に多く見るが、多くそれは、ある後天の生理、人爲、偶發の障礙に匿され、長く假睡してゐた本然の德質かたまたまの精進により瞭確に闡明せられたに過ぎぬ。

この民主の時代に於て、心性鈍(うとま)しく眞純の氣稟に乏しい迷蒙不遜な民人が、輕佻な野望に驅られ劣材を賴んで藝術の神壇を蹂躪し汚損して憚らぬのは允し難い瀆神の一種である。

民に知らしむべからずとした本邦中世期の藝術的理想を今尙踏襲するものと迷斷してはならぬ。

藝術は人間最高の心的活動の一てある。鈍劣不遜の民人が頓悟して此の祕壇を垣間見んとならば、若き沙門の修道の如き心にて其の知見の誇りを捨て藝術の理想の大旛の前に跪拜せよ。祕壇の回轉扉は十方の心貧しい巡禮をこばまない。今の民主的理想を狂信する事深き輩は、神聖壇を象牙の塔よりささげ出てて巷の十字街に置く。これは許さるべき進展である。然し、不遜と賤劣との外に何物もない民人の凡ての安閑たる懶惰に便するために、彼等は全く藝術本然の不可思議性を閑却して何等かの型式に於て第二義藝術の制作に自足してゐる。民人を愛撫せずして、民人の概念を愛撫する事に耽湎してゐる。かくして民人は彌か上にも不遜と賤劣に墮してゆく。從つてそれらの理想は、誠に民人のためてはなくて、『彼等の民人の概念』のために、藝術を劣等化して了ふ。現代の民人は幸福にも、不眞面目に腹這ひしてゐなから、懇切に口邊まで當てがつてくれる藝術家の藝術的食料品を不消化のまま呑み下す。然し、遂に、最も善良な藝術は、必ずしも衆俗凡ての味解を待つ事は出來ぬ。足を投げ出した民人らに尊き藝術品の凡てを易く嗜むことは許されぬ。民主的時代の衆民は、心より藝苑に至るの道を知らぬ咀はれた思想上の賤民てある。

六

かかる傾向は、天才をも且つ賤民の酒料のために不當の勞役に服させ、彼岸の友を覗ふ火器をも負はしめる。謬り進められた文化、不消化の教養、惡の一旦の勝利は世界戰爭の第一の口火を點じた。此の戰役は惡疾の年重つた末に迸り出た膿血である。

若しかかる戰ひが、ある善良な結果を導くとしたら、それは少くとも前世紀から今代に及ぶ文化の根本精神の觸手が恆に不斷に惡傾向に向つてのみ增進させられて來たと云ふ恐ろしい事實の自覺を強ひる迄にある。近代民主々義の實生活上の理想は、正しい民、謙虛ある民、神を跪拜することを知る民による民主てはない。既に、覺醒は彼等の大腦を刺衝して居る。彼等は根柢より改更しなければならぬ。築き直さなければならぬ。正しき文化の樣式は、まことの人間の生活型式は、何時の時代にも恆に天才の腦裡にのみあつて覺認(ノヤウキヤ)される。民人は天才の前に昔の神に對すると等しき謙抑にて禮拜しなければならぬ。そして天才の幻覺の裡から萬能の審士の正しき笏を吹奏させなければならぬ。かく勵むは民人の與へられたる責務である故に。

七

靈感の神馬(ペガサス)に鞭打つて天界に徜徉する詩家と、思念の綱を手繰つて實在の聖體盒に參ずる哲人と（優れた宗門の偉材は、兩個を兼ねたるもあれば、其の一により法悅の祕觀に入るもある）は、偏寵の神子てある故に、神の意志による人間靈性の最大級の奔躍が彼らによつて試される。この使命は自然の自發的意欲てある。この出產は混沌に於ける炎の出現てある。かれらの足跡は一一に神の業蹟てある。經驗の種々相と眼前に展開された現象界の華麗に眩惑されて、人間は神の物の中心の心根を讀む術を識らぬ。各時代に於て凡そ衆愚は靈性頽廢の斷崖に彳み、思慮するところなく神の御國のための正義に罵詈の癡言を吐く眞理の仇敵てある。

天才を神の御國に働かしめるのは神の意志である。天才を人界で働かしめるのは民人の責務である。天才は神と人との溝渠に横たはる棧橋である。今代民主々義の理想は、この棧橋に向つて火を放たむとする。黑金の如く堅固に孔雀の如く壯麗な眞理は恆に孤寂と崇貴との間にのみ產れる。

八

古代波斯白毛道衣派（スーフヰズム）哲人の一人が、たまたまの法悅に陷つた際、『われは神なり』と稱へ、天界の極祕を悉く其の徒弟等に傳へた。事は數回反復された。一人の徒弟がある日の恍惚から覺めた師にこれを告げた。哲人は面色を變へて愕き、且つ徒弟の情を謝し、さて『かかる事が將來再び繰り返されたならば、直ちにこれで己れを刺してくれ』と一振の短刀を手渡した。翌日、師はまた法悅に入つて天界の祕を傳へ初めた。徒弟は矢庭に飛ひ掛つて師の咽喉を刺した。此の時、短刀は鐵板に當つたやうに撥ね返つて、徒弟の咽喉深く突き刺つた。

法悅は神の意志である。個體は選ばれたる神子である。人力以上の處に超人力が在る。天才は神から下つたか。人から上つたか。

九

『まことの詩は、詩篇でなくて詩人其のものである。』われらは詩の透明な光を、內なる世界より假象世界へ、抽象より具象へ、軈て紙上に捕獲せむとする欲望に捉はれ

る。このとき言葉が生れる。

言葉は假りの媒介者であるが、内なる世界に交渉の度合深ければ深いだけ言葉を愛寵する情致が深くなる。言葉は、それに泥みすぎることのない程度で專念に磨かねばならぬ。心性史の金鑛から掘り出された言葉の粗金(あらかね)は、磨くに從つて燦然の光を放つ、此の時自づから言葉は詩興の壺に嵌まる。言葉を絕對に驅使するには、彼等をその傳統の羈絆から切り放たねばならぬ。言葉は心の庭で心が磨き出しやがて形の與へられるのであるが、其の歷史を一一に亡ぼして新しい個性を與へねばならぬ。性命の鮮血をそそがねばならぬ。

十

象形文字の精靈は、多く視覺を通じ大腦に傳達される。音調以外のあるものは視覺に倚らねばならぬ。形態と音調との錯綜美が完全の使命である。この『黃金均衡(ゴールドウノ・アベレイン)』を逸すると、單に斷滅の噪音のみが餘計に響かれる。

象形文字を使用する本邦現代の言語は、其の不完全な語法上制約に縛られて、複雜の思想と多樣の韻律とを鳴りひびかするに先天的の不具である。

文語と日常語と日常語的文語との各區分もややこしい問題である。

多くの論議以上、われらは今の日常語を完成する使命を痛感してゐる。内なる世界を顧みると、われらは詩作に際し、此の痛感以外に、以上三體の言葉を自由に種別に順應せしめて使用したい欲求を有つことを餘儀なくされる。此の詩集には主として文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com